『詩經』
歌垣詩に於ける採草の詞に就いて

福本郁子

『詩經』中、採草行為を興詞、乃至は興的発想として有する詩のうち、歌垣に関わる内容を詠う詩、は三篇あり、箋風・桑中篇、箋風・溱洧篇がこれに當る。本論に於いてはこの三篇から箋風・桑中篇、箋風・溱洧篇の二篇を解
説し、歌垣詩の中に採草行為を詠い込むのは如何なる理由によるものであるかを考察する。

詩を解説する前に歌垣が行われる目的に就いて簡単に説明しておく必要がある。歌垣は春の農耕系祈儀に基づいて行う農作物の豊穣を祈願する為の呪詛行為である。歌垣に於いては男女が配偶者を求め、或は女性の速やかな妊娠と多子が期待されることが多い。この他ならぬ農作物の豊穣祈願の為である。歌垣に於いて男女が配偶者を求め、或は女性の速やかな妊娠と多子が期待されることが多い。
女性の生産行為により期待される女性の懐妊・多産と大地の豊饒との関係に就いて渡辺昭五は、

男性行為＝種子の結実という考え方があるが、生殖＝生産をもしくは生殖＝豊作の観念を固定化し、

神聖な神聖を調和する神聖をこの観念を媒介する絶対的なものとして、人々はマツリの場にこのような行為を行ったのが、歌垣＝壇歌会及び歌垣の機会を今日まで保存させた最大の理由である。

これにより期待される女性の懐妊・多産と大地の豊饒の観念が、一年を通じて春に始まり秋に結実するという男女の関係が、農作物の結実に対して行われ、その間に性と穀物の結実が何度も繰り返されてきた歌垣に対する見解であるが、それはひとり我が国の例にとどまらず、

後二句に婚禮に関わる内容がそれぞれ句句で詠まれている。これは當時の人々にとって大地の豊饒と新婦の懐妊・多産とが互いに切り離して考えられるべきなのでなく、穀物の豊饒が女性の多産を誇ると同時に、女性の多産が穀物の豊饒を賜る。
と考えられていたからなのである。
大地の豊かな稔りとは古今を問わず、農耕民族にとって最も願わしい事項の一つであった。その一方で、直接的な労働力の確保や一族の子孫繁栄に繋がる女性の多産もまた彼等にとっては願わしい事項の一つであった。彼等はその願わしい一方を言の葉にのせる一方の実現を願ったのである。即ち女性の懷妊と多産を願うの Rena voisime de 地の稔りを願うのは他ならぬ大地の稔りの為であり、本来後者は二義的なものであったことは言うまでもない。歌垣という習俗の根拠にはかくの如き呪術的な概念が存していた
と見るべきなのである。
歌垣が本来春の農耕豫祝儀礼の中の一形態であり、その目的が一義的に年穀の豊饒にあったことの傍証として、それが水邊で行われることが多かったことも明らかであろう。 Awakening the 健儀礼とは本来水神祭礼の一形態であり、かかる祭祀は山川・海・泉・河等の水邊であつたことはよく知られる所であるが、これが中国でも同じであったことは、歌垣の一形態として河邊で行われる渡河の儀礼の例からも明らかであろう。渡河儀礼は農耕豫祝儀礼の中の一形態であり、渡河儀礼を背景に説明する歌垣は水神祭礼の一形態として存在していた
ものであった。渡河儀礼は家井真が水神を祀り、河川を祀る儀礼とその場とは、神聖なものであった。かつての原義は忘れ去られたが、その原義が忘れ去られた場合、相違の豫祝儀礼の場
として説われる歌垣の場となった。農耕社会に於ける儀礼は濃厚な物で、祭祀を祈願する豫祝儀礼と收斂儀礼とに收斂される那を、「詩經」に於いては特定の興詞として一定の型に定着して行く。水神を祀り、豫祝儀礼の一環としての渡河儀礼が、その多産という呪力の故に類感呪術的に男女の多産を目的とし、祈願する婚姻歌に興詞として定着して行くので
ある。  

『詩経』の歌垣詩には、「東」「秋」「春」「春」の如く、早い段階から忘れ去られたと考えられ、或いは種々の儀礼が一様に混在し、或いは儀礼の中的一部が突出するなどして歌垣は様々な形態に姿を変えながら、更に時代を下って五掛七八村から構成されている武鳴県東部では現在でも一の村で歌垣が行われている。そのうちは橋北村の東方にある羅波街という村で一九七四年以前に行われていた歌垣は、舊暦三月九日に「ダッカッ」、という蛇や龍に似た想像上の動物を祀る形で行われ、直接的には雨を祈願していたが、これを招来し祀ることによって間接的に降雨を願う祀りであると報告されている。羅波街の人々にとっては「ダッカッ」とは漢民族にとっては龍の如き存在であり、龍と同じ水神としての性格を有しているようである。そしてこの歌垣が水邊に於いて行なわれることの観を考慮すれば、この求雨儀礼の性格を探求する羅波街の歌垣は、農耕豫祝儀礼の一環として行われているのである。歌垣は本來、春に行われる農耕豫祝儀礼の中に包括されるべき儀礼の一形態であった。農耕豫祝儀礼の中に組み込まれた歌垣は遺体であると同時に女性の多産をも祈願する目的で行われるようになる。やって遺体の豐饒を祈願するという本來の目的が人々の間で薄れ、或いは忘去されて、歌垣を行う目的は明確でなくなり、次第に
如上の歌垣の目的を踏まえた上で、採草を詠む歌垣詩、郷風・桑中篇の解釈を試みたいと思う。

採草行為を詠む歌垣詩の

中でその行為が興詞として使用されているのは郷風・桑中篇と唐風・采苓篇の二篇である。

第一章

愛粵唐矣、沫之鄉矣。

第二章

愛采荑矣、沫之北矣。

第三章

愛采葑矣、沫之東矣。

云誰之思、美孟姜矣。

期我乎桑中，要我乎宮。

送我乎淇之上矣。

各章首二句に見える採草行為に就いては後で論ずるとして、ここでは先ず詩に語語、訓読、日本語譯を附す。

部

冬部。○陽部・前二章と遙韻。

第二章

押韻。○冬部。○陽部。前二章と遙韻。

第三章

○冬部。○陽部。前二章と遙韻。

今按以假為台。書湯誓篇云、夏罪其如台。史記殷本紀作今王其奈何。此台訓為何之譯也。○同例。愛誰皆問問名詞、猶言任何處也。本篇曰、愛居愛處、愛喪其馬、于以求之、于林之下。正義云、若我家人於後求我、往於何處求之。當於山林之下。按孔氏用箋釋之為往，非也。高宗彤日篇云、乃日其如台。殷本紀作曰其奈何。又西伯勘黎篇云、今王其如台。殷本紀作今王其奈何。此台訓為何之譯也。○又變文避復、兼以足句。桑中篇日、愛采荑矣、沫之鄉矣、與下文、云誰之思、美孟姜矣、文同例。愛誰皆問問名詞、猶言任何處也。
「詩経」歌垣に於ける採草の興詞に就いて

〜四六〜

とあり、陳奐が「采訓取者、傳為采字通訓。采從爪，取從又，爪又，皆手也。廣雅釋詁、采、取也，言如爪，採的原字で、取、採取する意。」と述べ、採り取る」という意味がある。

「詩経」で採り取るという行動は、現代においても植物の採集に従事する人々が日々に行っている活動である。採集の方法や目的、用途は多岐にわたり、主に草木の葉や花、果実などを使い、薬材や食材として利用されることも多い。

特に重要なのは、自然環境の保護と持続可能な利用の観点から、採集を行う際の注意点を守ることが重要である。適切な時期に、適切な方法で、適切な量で採集を行うことが求められる。

採草の行為は、古代の詩の表現手法としても用いられており、「詩経」の多くの詩において採草についての興詞が見られる。この興詞は、採草の行為を通じて、自然と人間の関わり方を語り、自然の美しさを表現する手段として用いられてきた。

以上のように、採草の行為は現代においても重要な役割を果たし、また、歴史的な背景を基にした詩の表現手法としても、美しく、深く、捉えられている。
ある如く、かつら、ほとりの意。「送我乎淇之上矣」とは男性が思う相手に、淇のほとりまで送ってくること
を願う句で、他篇（氓篇・済陽篇）にもかかる用例が見えることから、常時に於いては歌垣で男女の思いが通じた場合、女性が男性を送って行くという習俗があったと考えられる。○「麥」は和名命名、カブ類（小野蘭山）。地下根を食用とする蔬菜である。ここは葉の部分を採集するのである。

第一章

愛くにか薰を采ら

第二章

愛くにか薰を采ら

第三章

愛くにか薰を采ら

の上に送れ。

其の上に送れ。

（我が思ひ人よ）

私の桑中の地で（逢うと）誓っておくれ。

第二章

どこでオオムギを採るか、それは稀の北にて採る。

どこでオオムギを採るか、それは稀の北にて採る。

誰のことを思うのか、稀の北に採れ

誰のことを思うのか、稀の北に採れ

美しさ孟広。

美しさ孟広。

我と桑中に期ひ、我を上宮に要へ、我を淇

我を上宮に要へ、我を淇

う。（我が思ひ人よ）

う。（我が思ひ人よ）

私は桑中の地で（逢うと）誓っておくれ。

私は桑中の地で（逢うと）誓っておくれ。
第三章

どこでカブの葉を採るのか、それは水の東（採る）。

誰のことを思うのか、美しさ孟広のことを（思う）。

が、桑中篇の詩意及び首二句に見える採草行為の意味は從来如何に解釈されてきたであろうか。毛序には、

特に首二句と詩意との関連性に就きて言及してはおらず、衛の風俗が淫乱であることを刺の詩であるとする。朱熹は「賦

衞いと首二句を賦であるとし、詩意を

衞俗淫亂、世族在位、相鬪妾女。故此自言將采唐於水、而與其所思之人、相鬪會迎送如此也。取

と、衛の風俗が亂れた時、唐の水に採りに行くことに詫れて逢い引きをするることを詠う詩で、淫乱に関する者自らの作であると

する。郎中朱熹は各章首句の採草の意味を、逢い引きの口訳と解しているのである。

マルセル・グランエは該詩は男女の集会、所謂歌垣の場に於いて詠まれた詩であることを指摘し、

香気ある花は無駄の用途を持って居た。すなわち浄め役立ち、消消しに有効であるとともに、これほ

たの場所で、一定の時期に、一定の事情のもとに、それらを採集することに意味があったとする点に就いては再考の餘地が

と論じている。植物と懷妊、出産との関連性を論する點は注目すべきであるが、花や種子などに特定の呪文を認めずに、一定
この詩の植物採集の本末の目的を最もよく示唆していると思われるのは赤塚忠の解釈である。赤塚は「検釈を供する神へ」「歌垣を採る」という行文がすでに思慕を表現するものであることを指摘している。採草行げるの作主を画したものが、男性への思慕を表現するものであるという。

＜詩録＞中で『歌垣詩に於ける採草の興詞に就いて＞

以下に詩の全文を挙げてこれに語説及び訓読・日本語譯を施す。

(四)

これで同じ歌垣詩である鄭風・溱洧篇を提示したが、ここでは詩中に「間」と「別段」の二種類の植物の名が見えている。
第一章

詩経於歌垣に於ける採草の興詞に就いて

第二章

【詩経】

第三章

上之以勺藥

第四章

【詩経】

第五章

【詩経】

第六章

【詩経】

第七章

【詩経】

第八章

【詩経】

第九章

【詩経】

第十章

【詩経】

第十一章

【詩経】

第十二章

【詩経】

第十三章

【詩経】

第十四章

【詩経】

第十五章

【詩経】

第十六章

【詩経】

第十七章

【詩経】

第十八章

【詩経】

第十九章

【詩経】

第二十章

【詩経】

第二十一章

【詩経】

第二十二章

【詩経】

第二十三章

【詩経】

第二十四章

【詩経】

第二十五章

【詩経】

第二十六章

【詩経】

第二十七章

【詩経】

第二十八章

【詩経】

第二十九章

【詩経】

第三十章

【詩経】

第三十一章

【詩経】

第三十二章

【詩経】

第三十三章

【詩経】

第三十四章

【詩経】

第三十五章

【詩経】

第三十六章

【詩経】

第三十七章

【詩経】

第三十八章

【詩経】

第三十九章

【詩経】

第四十章

【詩経】

第四十一章

【詩経】

第四十二章

【詩経】

第四十三章

【詩經】

第四十四章

【詩經】

第四十五章

【詩經】

第四十六章

【詩經】

第四十七章

【詩經】

第四十八章

【詩經】

第四十九章

【詩經】

第五十章

【詩經】

第五十一章

【詩經】

第五十二章

【詩經】

第五十三章

【詩經】

第五十四章

【詩經】

第五十五章

【詩經】

第五十六章

【詩經】

第五十七章

【詩經】

第五十八章

【詩經】

第五十九章

【詩經】

第六十章

【詩經】

第六十一章

【詩經】

第六十二章

【詩經】

第六十三章

【詩經】

第六十四章

【詩經】

第六十五章

【詩經】

第六十六章

【詩經】

第六十七章

【詩經】

第六十八章

【詩經】

第六十九章

【詩經】

第七十章

【詩經】

第七十一章

【詩經】

第七十二章

【詩經】

第七十三章

【詩經】

第七十四章

【詩經】

第七十五章

【詩經】

第七十六章

【詩經】

第七十七章

【詩經】

第七十八章

【詩經】

第七十九章

【詩經】

第八十章

【詩經】

第八十一章

【詩經】

第八十二章

【詩經】

第八十三章

【詩經】

第八十四章

【詩經】

第八十五章

【詩經】

第八十六章

【詩經】

第八十七章

【詩經】

第八十八章

【詩經】

第八十九章

【詩經】

第九十章

【詩經】

第九十一章

【詩經】

第九十二章

【詩經】

第九十三章

【詩經】

第九十四章

【詩經】

第九十五章

【詩經】

第九十六章

【詩經】

第九十七章

【詩經】

第九十八章

【詩經】

第九十九章

【詩經】

第一百章

【詩經】
往也。既且。言已経去過也，と言う如。従に通し。往く意。下文の「且往観乎」と「洵計且樂」に見える「且」は意味を異にする。○「且往観乎」の「且」は高字が「且。再也」と言う如く、更に「層の意で。"さらり、と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」もこれと同義。○「洵計且樂」の「且」は低字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。下文の「洵計且樂」の「且」は高字が「且、再也」と言う如く。従に、層の意で。「さらり」と訓する。
第二章
たわむれあい、クロウリングを賜り合う。
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれていて
若者達は（漆水と漆水の間の中辺）に大勢あふれ
方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消へ]

方渡シ、[漆黒、これ其の消え]
第一章
家井直はこの詩の詩意に就いて「巫の巫舞に懸る於祝儀儀者を歌ったものであり、性の解放をともなうを歌ったものである」と論じ、以下の如き日本語譜を附している。

第二章
東南のシホニ、宛丘のクシギ。子仲の娘、その舞列のもてで舞う。
家井直は解釈する東門の粉粀、詩意は正しいと思われるものであるが、其の宗教的背景にあるものを春の農耕祝儀儀に對於る求雨儀儀を行うこととの礼文の複合・多産が祈願の主體となっていったものと考えられる。

第三章
良い朝 والإ歌を歌い（神を招く、さてこそ背を振るか）（巫たち、娘は舞列で舞う。
家井直の解釈する東門の粉粀の詩意は正しいと思われるものであるが、其の宗教的背景にあるものを春の農耕祝儀儀に對於る求雨儀儀を行うこととの礼文の複合・多産が祈願の主體となっていったものと考えられる。

筆者はこの詩を歌垣詩と解釈するものであるが、其の宗教的背景にあるものを春の農耕祝儀儀に對於る求雨儀儀を行うこととの礼文の複合・多産が祈願の主體となっていったものと考えられる。

東門の粉粀、宛丘の桝は言うまでもなく慣用句化された表現であるが、東門の粉粀、宛丘の桝は共通する宗教的意義が存するが故にこれらは一 المتعلقة詩の中に併記されると見えるべきものである。

一五五
『詩経』歌垣詩に於ける他の言詞が、その依代たる聖樹に呼び招く
第一章
椒聊之實，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。

第二章
椒聊之葉，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。

第三章
椒聊之實，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。

四章
椒聊之葉，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。

第五章
椒聊之實，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。

第六章
椒聊之葉，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。

第七章
椒聊之實，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。

第八章
椒聊之葉，蕃衍盈升。彼其之子，碩大且駑。
椒聊且，遠條且。
彼の子を詠むという如く大いなる意を解する如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ

は彼の子を詠むという如く大いなる意であるが、本末は大きな假面の意。延いて大きい意に用いられるようなものである。こ
末句に至っては「椒聊且、遠條且」と椒聊の多く笛をつけることがいつまでも続くが如く、娘が嫁ぎ先でいつまでも子寶に

恵まれて一家に繁栄を賜すであろうことを言説するのである。椒聊篇は喜を多くつける山椒を興詞に使用することで、嫁いで

ゆく女性の速やかな懷妊と多産を祝する詩であることが理解できるよう。椒聊篇に訓読と日本語譯を施すと次のようになる。

第一章
椒聊の實は、蕃衍して升に盈つ。彼の子は、碩大にして朋無し。椒聊よ、遠條たれ。

第二章
房なるのサンショウの實は、はびこり繁って升に満ちるほど稔った。（嫁ぎゆく）あの娘は、類無きほとどのふく

満な態みをつけ、房なりのサンショウの実よ、いつまでも豊かにたくさんの實をつけよ。

如上の椒聊篇の解釋によって山椒がその多産という性質を有するが故に女性の懷妊・多産を賜す呪物と見なされたことが

理解されよう。

では改めてこの呪物を春の農耕豫祝儀禮に包覆されるべき求雨儀禮の詩である東門之份篇の末句「贻我椒椒」に詠ひ込め

た理由を考えてもよい。この句に就いては既に高字が「巫者用椒供神。此句言女巫以椒贈送人」と解しているのが正しく、

巫が神（ここでは求雨を賜すされた諸神）に供した山椒を祭祀終了後祭壇より降し、参會者である「我」に配る意義である。

この詩は神婚の形式をとった歌垣詩であるので、「我」とは歌垣の参加者である男性であり、また、「子仲之子」と称されるの

が神の代行者である巫に当たる。繋り返すが、山椒とはその多子性故に女性に懷妊多産を賜すと信ぜられた呪物であった。
『詩経』歌垣詩における採草の異詞について

詩経で歌垣詩における採草の異詞について

で體現することに他ならない。供物として供された山椒自体には既述の如く呪力があるのであるから、これが祭壇に供され
ることで更にその呪力を増強させることができると古人は信じたのである。そこでは例えば祖霊祭祀の本壇終了後に行わ
られる直会における、参會者が供物として供し終えたものを祖霊から下されるものとして食すことと同様にして、実
言うことができる。換言すると、神の恵みは供せられた供物を介して参會者に等しく齟齬されるという趣である。東門
之粉篇末句の「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

更に付け加えておかねばならないのは、ここで神前に供される山椒とは必ず巫の手によって採集され神に供されるもの

体現させることが可能となるのである。この詩が神婚形式の歌垣詩であり「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

は先に述べたが、妊娠多産の呪力が齟齬されるのは何か女性ののみに限られているものではなく、新たな生命を生み出す呪力

に於いてはそこで齟齬された神の呪力によってその呪力が增大させられた山椒を手渡された参會者に、新しい生命を作り出す呪力を

りさえすればよかったのである。

更に付け加えておかねばならないのは、ここで神前に供される山椒とは必ず巫の手によって採集され神に供されるもの

體現させることが可能となるのである。この詩が神婚形式の歌垣詩であり「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

は先に述べたが、妊娠多産の呪力が齟齬されるのは何か女性ののみに限られているものではなく、新たな生命を生み出す呪力を

に於いてはそこで齟齬された神の呪力によってその呪力が增大させられた山椒を手渡された参會者に、新しい生命を作り出す呪力を

りさえすればよかったのである。

更に付け加えておかねばならないのは、ここで神前に供される山椒とは必ず巫の手によって採集され神に供されるもの

體現させることが可能となるのである。この詩が神婚形式の歌垣詩であり「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

は先に述べたが、妊娠多産の呪力が齟齬されるのは何か女性ののみに限られているものではなく、新たな生命を生み出す呪力を

に於いてはそこで齟齬された神の呪力によってその呪力が增大させられた山椒を手渡された参會者に、新しい生命を作り出す呪力を

りさえすればよかったのである。

更に付け加えておかねばならないのは、ここで神前に供される山椒とは必ず巫の手によって採集され神に供されるもの

體現させることが可能となるのである。この詩が神婚形式の歌垣詩であり「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

は先に述べたが、妊娠多産の呪力が齟齬されるのは何か女性ののみに限られているものではなく、新たな生命を生み出す呪力を

に於いてはそこで齟齬された神の呪力によってその呪力が增大させられた山椒を手渡された参會者に、新しい生命を作り出す呪力を

りさえすればよかったのである。

更に付け加えておかねばならないのは、ここで神前に供される山椒とは必ず巫の手によって採集され神に供されるもの

體現させることが可能となるのである。この詩が神婚形式の歌垣詩であり「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

は先に述べたが、妊娠多産の呪力が齟齬されるのは何か女性ののみに限られているものではなく、新たな生命を生み出す呪力を

に於いてはそこで齟齬された神の呪力によってその呪力が增大させられた山椒を手渡された参會者に、新しい生命を作り出す呪力を

りさえすればよかったのである。

更に付け加えておかねばならないのは、ここで神前に供される山椒とは必ず巫の手によって採集され神に供されるもの

體現させることが可能となるのである。この詩が神婚形式の歌垣詩であり「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

は先に述べたが、妊娠多産の呪力が齟齬されるのは何か女性ののみに限られているものではなく、新たな生命を生み出す呪力を

に於いてはそこで齟齬された神の呪力によってその呪力が增大させられた山椒を手渡された参會者に、新しい生命を作り出す呪力を

りさえすればよかったのである。

更に付け加えておかねばならないのは、ここで神前に供される山椒とは必ず巫の手によって採集され神に供されるもの

體現させることが可能となるのである。この詩が神婚形式の歌垣詩であり「始我授権」の「我」が男性の参會者であること

は先に述べたが、妊娠多産の呪力が齟齬されるのは何か女性ののみに限られているものではなく、新たな生命を生み出す呪力を

に於いてはそこで齟齬された神の呪力によってその呪力が増
歌垣詩にある鬱風・桑中篇に詠まれる採草行文の目的を解明するに際し、同じく歌垣詩である齊漱篇及び東門之篇に詠まれた植物が有する性質のうち妊娠多産に直結すると考えられるものとして挙げたのが、外見の特徴からくる「多子的性質」と、利尿楽・強壯楽という効能からくる「媚楽的性質」であった。そしてこれらは東門之篇及び椒黴篇に詠まれた、山椒に就いては「多子的性質」にそれぞれ照準を合わせて論じてきた。しかし椒黴楽が既に指摘する如くかかる植物の有用性は更に大切に止まるものではなく、齊漱篇の「鬱風」は他に食用と香草としての用途を、「齊漱篇に於ける採草の興詞に就いて

（未）
やるといいところが、周りに呪術的な力があれば、食べ物や香草としての性質が「多子の性質」や「媚薬の性質」の場合とは別の経路で懸念されるものである。よって、それらを水に練って飲むこともできる。香草によっては、神に供され、多子の性質が懸念されるということになる。実際にそれが神に供され、多子の性質が懸念されるということになると、その力が神に供されるということになる。

また、水は東門の付随篇及び椒柳篇の「山椒」にはじまって、その多子性が懸念・多産に結びつく要素になったことを指摘しており、現在でも山椒の葉や実の部分が食用、主に香辛料として使用されることが多い。その他の如上の性質に基づいて神前に供され、多子性が懸念されるということになると、その力が懸念されることになる。実際にそれが神に供され、多子の性質が懸念されることになると、その力が懸念されることになる。
「詩経」歌垣に於ける採草の興詞に就いて

『美孟邁』「美孟邁」と称される美しい巫の手による春の農耕詩に於ける「美孟邁」を示す。

桑中篇首二句に「愛染唐矣，沫之陥矣」愛染麥矣，沫之陥矣，と謳われる採草行為は、「美孟邁」の詩の雰囲気を反映している。
『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて

『詩經』
歌謡詩に於ける採草の興詞に就いて